

## 01 らめん狂の詩

### こんがり肉G

誰が食べても1番美味しいラーメンなど存在しない。

それが全国をさすらってラーメン屋を食べ歩いた私の辿り着いた真実だった…。

言ってしまうと全く当たり前の事だが、しかし、この真実に辿り着くまでに私が一体どれほどの井を嚙り平らげて来た事か…。

シンプルで飽きの来ないあっさりとした昔ながらの《醤油ラーメン》。

スープに嘘をつかない《塩ラーメン》。

味噌のコクで麺と具材を最大限に引き立て活かす《味噌ラーメン》。

トロリと濃厚で官能的な《豚骨ラーメン》。

《魚介醤油》 《豚骨醤油》 《背脂醤油》 《あんかけ》 《坦々》 《鳥白湯》。

このそれぞれが誰かの1番で、またその逆でもある。流行などに捕われる必要など無い。客には《選ぶ》権利がある。客は、自分が美味しいと思う物だけをただ食せば良いのだ。

全国を放浪する日々の中で私は、愛用していた《全国ラーメン屋ガイドブック》を捨て、いつしか私自らの1番を探し続けていた。

今日見つけた店は、寂れた飲み屋街の片隅にある小さな店だった。閉店の時間が近いからなのか、いつもそうなのか、店先に人影は無い。

酔っ払い相手の店など程度が知れているって？それは素人の浅はかさ。隠れた玄人のこだわりにより場所や客足は関係ない。

《昇龍軒》と書かれた《のれん》を潜ると、煮干しの少し生臭い香りが鼻をくすぐった。煮干しベースの…。シヨウガと野菜クズの香りもする……………これは？

これは…醤油。醤油ラーメンか。

『へ、らっしやい。』

決して愛想が良いとは言えない店主の声が私を迎えた。今時では珍しく、白い調理帽でキツチリと髪を隠している。これは好印象だ。ただ店全体の清潔感は若干悪い。

私はカウンターに座った。ラーメン屋はどうしたってカウンターに限る。

店内を見回すと他の客はテーブルで酔い潰れている中年のサラリーマンが一人しか居なかった。頭に巻かれた茶色いネクタイが哀愁を漂わせている。

ふとカウンターにメニューが置かれていない事に私は気付いた。

メニューが無い。

メニューを求め店内を不思議そうに見回す私に店主が声をかけた。

『ラーメンと大盛しか無いよ。』

『あ、じゃあラーメン一つ。』

一途にラーメン一つで勝負か…。面白い。期待出来そうじゃないか。

『へ、ラーメン一丁!』

何故か店主が声を上げた。

他に従業員は見えないが…。造る前に自分に気合いを入れる儀式なのだろうか？

店主が麺を手に取り険しい顔つきで麺を見ている。やがてもう一つ麺を手に取り今度は、両方を比べる様に見つめ始めた。

いきなりその片方をポリバケツに放り込んだ。店主の気に入らない麺だったのだろうか？躊躇無い店主の行動に私は呆気に取られてしまった。

『シャツ!』

軽い掛け声と同時に麺を茹で始めた。タイマーを押し店主は次の作業に手をかける。

スープだ。分量スプーンで素早く用意した丼に3種の液体を入れて行く。あれは…生醤油と脂。それと…。ショウガ入りの自家製タレと言った所か。

店主がひらりと身を返すと深めのお玉が手に握られていた。実に素早い…。寸胴鍋から汲まれた透明感のある汁が丼に注がれる。瞬く間に美しいあめ色のスープが完成した。じっくり煮込んだスープを几帳面にアク取りしないとあのスープの色は出ないだろう。

長年繰り返された動作は寸分の無駄も無い。冷蔵庫の具材をさつと調理台に並べる。

白ネギ、チャーシュー、シナチク、そしてナルト。

奇をてらう事のない具材のラインナップは、私を興奮させた。私好みだ。もしかこの店なら…。

ピピ…。ピピ…。

まるでタイマーのアラームが鳴るのを知っていたかの様に店主が寸胴鍋の前に立っていた。

麺を鍋から上げ、湯切りを始める。

チャチャ…。チャツ。チャツ。チャツ。

小振りながら手首のスナップを充分に効かせた見事な湯切り。数も五回と多くも少なくも無い湯切り回数がまた実に良い。コシのある麺が活きる回数だ。

素早く麺をスープに放り込むと店主は、まるで麺を遊ばせる様に調理箸でスープに馴染ませた。

瞬間。。

『へ、ラーメンお待たせ!』

カウンターに…。私の前に一杯のラーメンが運ばれた。店主…。いや。達人の顔には、心憎いまでの自信の笑みが張り付いていた。

馬鹿な…。具材はいつ載せたのだ。

ラーメンにはまるで計算されたように美しく具材が載せられている。

まさか私が見逃すなど…。ラーメンを少しでも冷まさぬ様、達人の手は神速の如き速さで盛り付けを完了したと言う事が…。

『冷めない内に……………。』

達人が小さな声でボソリと呟いた。語尾が良く聞こえなかったが意味は通じる。

ああ…喰ってやる…！喰ってやるとも！

私は、焦る気持ちを抑えてまず、レンジでスープを掬い顔に近付けた。なんと豊潤な香り。煮干しが…。このスープの中で煮干しが生きている…！

そつと口に運びスープを啜る。

ああ…、染みる……………。

この味は…、懐かしいこの味は…、今はもう無い…。子供の頃、両親と共に食べに行ったあのおばあちゃんの店の味だ……………。

深い望郷感が身体を包む。私の1番のラーメンは…、もう帰れないあの…忘れぬ少年時代の…。思い出のおばあちゃんのラーメンだったんだ。

すっかりスープに魅了された私は続いて麺を啜った。細い…。スープに絡まるいい麺だ。麺の程良い弾力が堪らない……………。幸せ……………。

一仕事終えた達人は、眠るサラリーマンの隣で一服し始めている。全く貴方には完敗だ。ゆっくり休んで下さい。

薄めのチャーシューを箸で捲くり上げた私の全身に悪寒が走った。

有り得ないモノの一部がチャーシューの下に見えた。

コレは何かの間違いだ……………。

そう自分に言い聞かせ、深く息を吐いてもう一度チャーシューを摘み、拾い上げる。

今度はラーメンに…。いや…。料理全般に入っているのはイケない生物の全身が、しっかりと見えた。

これは主に台所に棲息するあの黒い奴じゃないか…。スープで溺れている…。バサバサと黒い羽根がスープを波立てた。

『オ、オヤジィ!!』

『へ。なんでしょ?』

『なんでしょじゃないでしょ!!……コレ!!』

『あ…。こいつ…。すみません今取ります。』

『もういらねえよ!もうガツカリだ!チクショー!!』

私は金も払わず店を飛び出した。

ラーメンに1番は無い。そして客は自由に店を選べる。流行など気にせず、あなたの好きなラーメンを思う存分選べばいいと私は思う。

完

## 02 達人喫茶

浅倉達也(婿養子)

「いらつしゃいませ」

おかしな名前の喫茶店。『達人喫茶』。

ムシヤクシヤしている男が一人、この名前からいちゃもんつけて憂さを晴らしてやるつと、ドアを開けたと同時に、そうマスターに迎えられた。

しばらくすると、店の外にも聞こえるほどの大きな音がして、すぐに静まり返った。

カランカランカラン。

先ほどの男とは違う、若いカップルが出て行く。若いくせに、何年も連れ添った熟年夫婦のように見えた。

その立ち去る姿を追うように、だが、それに気がついた様子もなく、また一人。このおかしい名前に喫茶店の前に、暗く幸薄そうな若い男がやってきた。

見るからに怪しい名前だ。

店構えは普通で何処にでもありそうではある。ただ、何処かと問われると困るのだが、諒助好みの佇まいではある。だが、あまりにも立地が悪い。喫茶店経営に興味があるわけではないが、人通りの少ない、住宅街のと真ん中。アットホームを売りにしているのかも知れないが、だったらこの名前は、悪いというよりもありえないだろう。ただ、雰囲気は諒助好みなのだ。

怪しさよりも好奇心。閑静な住宅街に突如現れた喫茶店。しかも、諒助好み。ふられたばかりの諒助を包み込んでくれそうな優しさをもし出している。先ほど立ち去ったカップルが今このタイミングで出てきたら、諒助は間違いなく入らなかった。時間的運も含まれていたことに、諒助自身気がついていない。そこにあつた全てが、店内へと誘う腕となつて、諒助を導く。入ることにした。

「いらっしやいませ」

漫画に出てきそうな、絵に描いたそのままの、いわゆる「喫茶店のマスター」が諒助を迎えた。ヒゲにパイプ。ちょっと無愛想な面持ち。それも含めて、諒助のイメージと寸分違わず合致する人が。

奇異な店名に対する不信任。失恋の痛み。あるはずの躊躇いを突

き抜けた、嬉しさというか喜びが諒助の中で一気に膨れ上がった。

その感情が頂点まで昇りつめて、戸惑うほどの高揚が訪れた。醒め始めたころに気がついた。諒助に覚えのある経験では前例がないほどの、昂りだったのだ。

自分自身に戸惑っている諒助を、マスターは怪訝な目で見つめていた。それに気がつき、照れ隠しのように店内を見回した。それほど広くない店で、客足が伸びるような場所であるにもかかわらず、諒助の他にも客が数組いた。思いの外人気店である。諒助には気恥ずかしさもあつたので、他の客と距離をとって、隅のカウンター席を選び、腰を下ろした。

「なににいたしますか？」

「えーつと、コーヒー……い？」

メニューらしきものを探しつつも、「とりあえず、ビール」並みの感覚でコーヒーを頼もうとしたとき、カウンターの上の小さな立て看板が目に入り、言い淀んだ。

「に、にじゅうさんまんごせんえん!？」

あまりの金額に平仮名でたどたどしく叫んでしまった。ありえない。このありえない金額に諒助は呆れるではなく、怒りに火が付きて天を衝いた。怒り心頭。

勢いのまま、マスターに食って掛かると一気になら食え突き落とされたのか宙を舞ったのか、無重力空間にいるかのごとくあしらわれ、床に突っ伏されてしまった。押さえ込まれて呆然とする諒助を、菩薩のような笑みのマスターが静かに諭した。

「お兄さん、よく見て下さい」

崩れた四肢を起こされながら、改めてメニューを見た。235,000

円「・（カンマ）」ではなく、「・（ピリオド）」が打たれている。

「元はね、『230円50銭』で、50銭はサードスさせていただきます  
つていう、ネタだったんですよ」

それよりも「・」の位置をずらして「二十三万五百円」に間違われ  
るほうが面白いと、常連客の助言で替え、それだと「230.500円」で  
見場が悪いからと、「235.000円」にしたのだと。

軽くあしらわれた上に、ユーモアと受け入れられずにまんまとは  
まった自分自身が可哀想に思えてきた。そういえばここに来たのは  
失恋したからだ、と、追討ちをかけるように可哀想な自分を思い出し  
てしまった。

「つまらないのよ、あなたと居ても」

ボタンと締まるドアの音と、彼女だったはずの女の、最後の台詞  
がリフレイン。

四六時中楽しませることなんて芸人だって不可能だ。もちろんそ  
ういうことを言っていたのではない。四六時中、つまらなかったの  
だろう。事実、つまらない人間だ。こういう事態にうまく切り返し  
のできない人間なのだから。切り返しができないだけではない。つま  
まらないと思われた理由は、諒助自身よく分かっている。感情表現  
が下手なのだ。

表情が顔に出ないだけでなく、そもその感情の起伏に乏しく、  
口下手。なにを考えているか解らないと言われることが、つまらな  
いと言われるよりも多く、人の輪から敬遠されがちだ。だから、「つ  
まらない」と称した彼女でさえ、諒助には貴重な存在だった。

これでもか、というどん底まで落ち込んだところで、諒助  
は自分自身がおかしくなった。ここへきてから、どうだ。

怒涛のように様々な感情が諒助の中に溢れかえっているで  
はないか。こんなこと、今までの記憶に、生きてきた中にあ  
っただろうか。いや、ない。そう思い至って、諒助は自分で  
も気がつかないうちに口元が緩んだ。

それを見たマスターも、口元を緩めて改めて諒助に椅子を  
勧めた。

「落ち着きましたか」

「ああ、すみません。一人で大騒ぎしてしまっ」

また急に恥ずかしくなつて、再度他の客の視線を探ったが、  
相変わらず諒助を気にした風はない。あれだけ騒いだとい  
うのに。

「どうぞ。コーヒーでよろしいですか？」

そういえばあの注文は生きていたのか。バツを悪そうにし  
てはみたが、カップの鳴る音が耳に心地よく響き、それと同  
時に香ばしい匂いが鼻をくすぐる。暖かそうな湯気が、穏や  
かな空気を作り上げて立ち込める。落ち着く。

こんな小さな音ですら心に沁み渡るほど響くのに、大立ち  
回りの自分に意も解さない周りに、圧倒された。赤くなる  
顔を隠すように、諒助は慌ててカップに口をつけた。

「うまい」

思わず口に出た。今までのこと全てを凌駕するようなうま  
さだ。おいしいなんてまどろっこしくて言っていられないく  
らいの、うまさだ。

「ありがとうございます」

マスターは穏やかに笑っている。こんなうまいコーヒーが



この世にあったのか。むしろこのコーヒーを出してくれたマスターにこそ、「ありがとう」という言葉を受けるに相応しい。二百三十五円。安い。二十三万五千円はさすがに出せないが、二万三千五百円……もキツイか。二千三百五十円。これなら十分支払べき価値がある。全てを至福で包み込んでくれる、懐の深い幸せなのだから、二万三千五百円でも本当はいのだろう。二十三万……コレは……。

「235円です」

ふとすると、先客が御代を支払い、席を立って帰って行く。

帰り際、ポンと諒助は肩を叩かれた。

「私もはじめはあんなだったよ」

やはりというか当たり前というべきか。先ほどの立ち回りに気が付いていないわけはなかった。気がつかないほうかどうかしている。苦笑いを浮かべて見送り、出て行ったのを確認して、マスターに問うた。

「人の悪い常連さん、でしたか」

「いや、初めての客だよ」

え？　と思ひ改め、マスターをまじまじと見直した。マスターは相変わらず、穏やかな笑みを浮かべ、静かに話してくれた。

「君の来る、一時間くらい前かな？」

諒助と同じように大立ち回りだった。語り終わって、人が悪そうにニヤリと笑った。諒助をおかしくなっ、思わず声を出して笑った。

あんなに達観しているように見えたのに。

俺もあんなふうになれるだろうか？　自分への問いかけが脳裏をよぎったが、このコーヒーを飲んでいると「充分なれる」と自分自身からの返答がある。

「あ、だからですか？」

この店の、おかしな名前。「達人喫茶」の由来。誰しもが達人のように達観できるほどのコーヒーを出す店、ということ。

そう話すと、マスターは今まで一番、楽しそうに笑ってくれた。

「そこまで言ってくれるとは嬉しいね。でも全く違うよ」

235,000円と同じ、シャレ。「マスターのお店」。「マスター達人」と和訳しての、店名。

「それじゃあどの喫茶店も『達人喫茶』になりますよ」

諒助も楽しく笑った。

ふられたことなど遙か昔のように。彼女がいた時だって、彼女の前でだって、こんなに楽しく笑っていなかった。こんなに楽しく笑えるときが、ふられてすぐに、こんなに早くに来るなんて。

思えばこの店に入ってから、全ての感情が頂点に達した。そんな意味では、諒助も達人といってもいい。

カランカランカラン。

この不思議な「達人喫茶」に、また一人、客がやってきた。今度は俺が達観を決め込んでやろう。諒助は密かに思う。



柔和だが無愛想にも見える笑顔で、マスターは客を迎えた。  
「——いらっしやいませ」

### 03 猫じゃらし師

#### ふつきめい

作業台の上には血と残骸が残り、剥がれたばかりの毛皮が広げられていた。

私服刑事の刑部誠二巡査部長は、制服警官に組み伏せられた白い作業エプロン姿の男のボディチェックを行う。刑部は初老と言つて良い年齢だが、その目は鋭く動きに隙はない。

「動物愛護法に」

男のポケットから、ナイフを引っ張り出す。

「銃刀法もプラスだな」

「刑部、さん！」

奥のドアから、悲鳴にも似た声がした。

「どうした、桜庭！」

刑部がドアに飛び込む。

同僚の桜庭佳泰と対峙していたのは、一匹の三毛猫だった。  
ただ。

「で……でかい？」

一・五メートルはあった。

桜庭に、猫が飛びかかる。

「おわっ！」

桜庭の頸動脈が噛みちぎられるよりも一瞬早く、刑部が猫を突き飛ばす。

次の瞬間には、猫は壁の上にある通風用の窓から逃げて行った。

防刃ジャケットを腕に巻き付け、刑部は路地を走る。

「……暴力団が遺伝子組換え生物とは、世も末だっ」

行き止まりから一つ引き返したところで、巨大な三毛猫の姿を見つけた。

刑部の顔色が変わる。

猫の前には、ブレザーにスカートの学生服を着た少女の姿があった。

「間に合えっ！」

刑部が猫へ突進しかけた時。

「止まって」

少女が静かに言った。

「驚かせたらダメです」

その手には一本のエノコログサ 猫じゃらし が握られていた。

ずっとエノコログサを持ち上げ、揺らし始める。

エノコログサは、指先で作る細かで不規則な揺れと、腕全体で作る大きな移動とが混ざり、あたかも一匹のネズミのように動き続ける。

最初、目だけでそれを追っていた猫は、次第に頭全体でエノコログサを追い始める。

少女は猫のすぐ前にエノコログサを近づける。

猫はほとんど反射的に手を出す、捕まる寸前に少女はエノコログサを引く。

これを数度繰り返すうちに、猫は頭を低く尻を振り始め、そして飛びかかった。

エノコログサは、ぐるりと少女の周囲を回り、猫はそれを追いかける。きっかり二周した後、彼女はエノコログサを放った。

いつの間にか追い付いていた動物運搬車両の捕獲用檻の中にエノコログサは落ち、猫はそれを追って檻の中に入った。

ミニパトの後部座席で、刑部は左に少女は右に座る。

細身で背が高く、髪は一見ショート風だが後ろで団子に結っている。目尻の下がった、笑ったような細い目をしている。

「怖くなかったのか？」

「バイト先にはもつとやんちゃな子いますよ」

「猫カフェ、か」

少女の手には、新旧の噛み傷やひつかき傷の痕があった。

「……あの子、本当に動物園に？」

少女は振り向き、後続の動物運搬車両を心配そうに見た。

「ああ。しかし猫友会にも駆除依頼を出してしまっている。残り五頭先に見つけないと」

「射殺……ですか」

「一般市民に被害を与える訳にはいけないからな」

「ご立派ですね」

「そんなに褒めるなよ」

「あははっ」

少女は細い目を一層細めて笑う。

「分かりました、この猫手苗、協力させて貰います」

苗は自分のハンカチを取り出し、手早く布玉を作る。

「鉄砲撃つしか能のない連中に、猫じゃら師の実力見せつけて差し上げましょう」

「猫じゃら師？」

「今考えました。特許出願中です」

ミニパトが住宅地を抜け商店街を通り、県道との交差点に差し掛かったところで。

「いたっ！」

苗が叫ぶ。

巨大な黒猫の後を制服警官二人が追いかけている。

ミニパトが前に回り込みドリフトしながら停まると同時に、刑部と苗が車内から飛び出した。

黒猫は刑部達に気付きビルの壁を登ろうとする。

その鼻先を布玉がかすめた。と、思ったら、また戻って再び鼻先をかすめる。

布玉には、糸が付いてあり、苗が端を持って操っている。

目の前を何度も横切る布玉を、黒猫は反射的に捕らえようとした。前肢が壁から離れ、そのまま歩道へ飛び降りる。

苗は布玉を捨て、ブレザーのポケットに差した複数のエノコログサを引き抜く。

指の間に一本づつ、計八本のエノコログサを扇のように開いてか

ら、緩急を付け振り始めた。

その間に、警官達の前に刑部が割って入り、射撃の中止を伝えた。

日はすっかり暮れ、空には星が始めている。

照明車のライトで照らされた公園は、警官が包囲し、近所の住宅の窓のいくつかから猟友会員の狙撃手が、他の窓からは野次馬が顔を覗かせている。

公園に、苗と刑部が入った。

「一発の発砲もなく最後の一匹、か。大したもんだ」

「最後が一番危ないんですよ、吉田兼好が言っていました」

「歴史、詳しいのか？」

「先週国語でやったんです」

住宅に囲まれた、百メートル四方程度のそこそこ大きめの児童公園。ブランコや砂場、滑り台等が設置され、周囲に木が植えられている。

「どこにいる？」

刑部が尋ねる。ライトで照らされているが、あちこちに影が出来、死角は多い。

「右の桜の木の上です」

公園の右隅にある桜の木の上の方に僅かに動く黒い影が見える。

苗が布玉を投げ、動かす。鞭か新体操のリボンのように、手元の動きが糸を伝わり布玉を操る。

幾度か繰り返すうちに、猫は催眠術にでもかかったように木から降り、少しづつ、少しづつ布玉へ近付き始めた。

苗はそれを確認して、徐々に布玉を自分に寄せていく。

木の陰から、ライトの元へ猫が姿を現した。

「……でけえ」

刑部が呟く。

黒と茶の縞々、頭から尻まで二メートルはある今までで一番大きな猫だった。

「ほーら、おいで」

苗が布玉からエノコログサに持ち替えようとした瞬間。

猫の脇腹に何かが突き刺さった。

「発砲……違う！」

住宅の窓の一つで、少年が嬉しげに笑いながら、ボウガンを振り上げていた。

突然の痛みと衝撃。目の前の苗の攻撃であると、完全に誤認し、猫は突進を始める。

猟友会員のライフルの銃口が、ぴたりと猫に集中する。

「待つて！ 大丈夫」

猫と射線との間に立った苗の左足に、二射目のボウガンの矢が突き刺さった。

「くうっ！」

苗は 足に矢を受けたまま、猫の前肢の一撃を紙一重かわしていた。

折り返して、飛びかかる猫をこれまた紙一重でかわす。次もかわし、そのまた次もかわす。間一髪、紙一重、最低限の動きで見切っている。

砂利の上にこぼれ落ちる血は、矢の傷だけで、猫の爪や牙によるものは一滴もない。

繰り返すうちに、猫の動きは鈍り足を引きずり始めた。タイミングを逃さず、忍び寄っていた警官隊が捕獲用の投網を猫にかぶせた。

「助けようとしたんだよ、マジで!」

連行されていく少年に背を向け、刑部は担架に載せられた苗に近付く。

苗は身体を起こそうとして、救急隊員に戻される。

「猫の傷は、どうですか?」

猫は麻酔で眠らされ、動物運搬用の車両に積み込まれる。

「大した事はないが、同じ事だ」

「え」

「六頭全部、殺処分される」

苗は目を見開き刑部を見る。

「嘘をついた事、許せとは言わないが謝る。君のお陰で、市民への被害が最小限に留められた、感謝する」

担架は救急車の中へ運ばれて行った。

動物運搬車両の金網のはまつた窓から、光る猫の目が見えた。

現場検証が終わり、照明車の明かりが落とされると、急に公園は暗くなった。

刑部は空を見上げる。

糸のように細い月が浮かんでいた。

「お疲れ様でした、刑部さん!」

缶コーヒーを持って、桜庭がやって来る。

「凄いですよね、あの娘。しかもちよつとカワイイし」

「……桜庭、調べ物を頼む。急ぎでだ」

「何をです?」

「動物園だ、日本全国リストアップしろ」

「分かりました!」

「遺伝子汚染生物? 困りますよ」

園長は首を横に振る。

「そこを、お願いします」

深々と刑部は頭を下げる。

「想定外の病原体や寄生虫の宿主になる可能性もあるんですよ。他の動物に伝染したら、どうするんですか?」

「園長は多忙の為、お会いになれません」

動物園の女性の事務員が、目を逸らしながら言う。

「ですが」

「私も業務がありますので、これで」

「どんな病気の動物でも受け容れると」

動物用ホスピスの院長が首を横に振る。

「うちが扱っているのはペットです。猛獣は対象外です」

「刑部、お前非番に何やってたんだ、動物関係の施設から苦情が来てるぞ」

上司の戸張朗がメモを見せる。

「猫の引き受け先を探してただけですよ、課長」

「あれは、明日には安楽死だろう。可哀想とは思うが、諦めるんだな」

「お忘れですか？」

「何を」

「捜し物にかけちゃ」

「刑部さん、来ました！」

電話を受けていた桜庭が、大声で怒鳴った。

「俺が達人だって事を」

巨大な猫達が六匹、じゃれ合う。

ライオンや虎のようでもあるが、その顔立ち、柄、身体付きは、やはり猫だった。

ガラス越しにその様子を眺める刑部の目尻は、自然と下がる。

不意に、首筋に何かが触れ、刑部は反射的に振り返る。

「あはは、びっくりしました？」

エノコログサ型の猫の玩具を持った苗が、笑って立っていた。

「驚かすなよ」

刑部はまた、猫を見る。

苗も、刑部の隣りに立って猫を見つめる。

「……なんか、偽善っぽいですね、私。世の中には、もっと」

「目の前のもんを助けて、やった良かった良い気分、で、充分だ。その先は偉くなってから考えりゃいい」

「年寄りはそのう割り切りが出来るから羨ましいなあ」

「褒めてんのか、それ」

「割と」

二人は、猫の前から立ち去り、猛獣舎の外に出る。

分厚くクリームを塗りたくったように、園内は真っ白い雪に包まれていた。

「でも、稚内で再会するなんて、凄い偶然ですね」

「大した偶然でも　ん」

刑部は靴の裏を見る。靴底がすり減って穴が空いていた。

「わ、そのまま歩いたら凍傷になっちゃいますよ？」

「駅前の靴屋まで走る」

「じゃ、また変な安物買わないように見立ててあげます」

「……高いの買っても穴が空くんだよ」

二人は動物園の出口へ走って。

「うおっ！」

「うひゃ！」

同じタイミングで、滑って転んだ。

雪がまた、ちらちらと降り始めた。

#### 04 ヨハマミッドナイトナサシナル

8月の濡れた砂

「愛してるって言いなさいよ！」

そう叫んで彼女はマシンガンをぶっぱなす。

「昨日五回も電話したのに…  
あなた一体なにしてたのよ！」

泣きながら彼女は手榴弾のピンを抜く。

断続的な、乾いた発砲音の後から、大気を震わす重低音が追い討ちをかけるように闇を震わす。

高速道路を降りたあたりから俺達にせまった追手の車は、派手に爆発炎上して夜を彩る。

マシンガンを肩から掛けて助手席から身を乗り出していた彼女は再び車内に腰を落ち着けて、ハンドルを握る俺をじっと見つめる。  
視線が横顔につき刺さる。

ねえ、なんとか言いなさいよ、マスカラの溶けた目元が沈黙のうちにそう語った。

「だからさー…昨日は徹夜明けで風呂にも入らず、ボタン、キュー、だよ。」

電話が鳴っている気配には気付いた、だけど起きあがることができなかった。

君の夢を百回みたよ、俺の気持ち、わかるだろう？」

「全然わからないわ、ちゃんとこっちを見て言っただろうかい」

「運転中だし、危ないよ」

「もう愛していない、のね」

また振り出した。

ひび割れたハートマークは真実の言葉では埋められない。密度の濃い湿ったジョークや色気のある嘘が、接着剤として最適なのだ。  
情熱は今や遠い日に見た、花火のように思われた。

二年前、彼女に出会って恋をした俺は、満員電車のどこにでもいる、吹けば飛ぶようなサラリーマンだった。

彼女は他の誰とも違った。

謎めいて、ミステリアスで、一挙一動、言葉の節々に官能的な秘密のベールを纏っていた。

俺は彼女の官能性に魅せられ、夢中になり、ノボせ上がったイノシシみたいに情熱的で、盲目だった。

そのベールに触れるたび彼女は動物のようにしなやかに俺の腕からすり抜けて、朝陽の前には消えていた。

彼女はまったく自分を語らず、完全無欠の偶像女神として昼夜を越えて、俺に君臨した。

狂おしいほどの愛と好奇心が俺の理性のタガを外した。

ある晩、俺は彼女を尾行し、そしてついに知ってしまったのだ。

ベールの奥を、秘密の女神の正体を…



…ピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロ

とばしの無線機からおどけた音が鳴り響く。

「はやくとつてよ」窓の外に視線を向けたまま彼女は言う。

ハンスフリーで通話を押すとタッチボードの上の液晶に映像がうつり、車内は青白く光り、まぶしい。

こちらへり、「ボス」聞こえますかー？

「聞こえてるわよー、

現在地点、ポイントX、順調に進行中よ」

仕事上での彼女の名は「ボス」。彼女は泣く子も黙る暗殺稼業の若きカリスマ、トップ・アサシン。日本国内の小事から世界各国の紛争や革命、国王暗殺計画にいたるまで、そのフィールドは多岐に渡り、裏の世界では伝説の女として生きながらにして神格化しつつある。

こちら現在、埠頭上空、車両位置確認しました。

「ボス、今日飛び込みでもう一件、現場あります。よろしく

彼女は、一瞬、セロリを初めて食べた少女の表情で躊躇して、すぐに事務的に「了解」と決断した。

彼女を尾行した夜、すべてを見てしまった俺を彼女は殺すことが出来なかった。

馬乗りになって、俺の喉元にナイフを突き付け、彼女は泣いた。

彼女の涙と鼻水がボタボタと俺の顔に降ってきて、なにがなんだかわけがわからず、俺もつられて二人で泣いた。

泣き疲れてやがて笑い、笑い転げたあとに彼女は立ち上がり、「さよなら」と言って夜に消えた。

彼女のきつぱりとした決断、に独り残された俺がいた。

俺は彼女を追うこともせず、忘れることも出来ずに時間を止めた。

壊れた時計は死そのもので、俺は激しい自責の中で殺されなかった自分を悔いた。

殺さなかった彼女を恨んだ。



へり、目的地上空で待機中、  
今夜のヨコハマは綺麗ですよ。

お二人さん、挙式は来週末だっけ？  
仕事詰まって行けそうもないんで、  
この場を借りて、おめでとう！

液晶のモニターにヨコハマの夜景が映る。車内を青白く照らす光に、  
目はもう既に慣れていた。  
窓の外を見たままの彼女が「そうよ、ありがとう」と事務的に返事  
をする。

彼女は煙草に火を着けてから、無線の電源をオフに落とし、ダッシ  
ュボードの中から拳銃を取り出して、安全装置を外し、握った。

本牧埠頭の灯台の火が海と彼女とを交互に照らす。

停車した密室のなかで壊れた時計が動き出す音がする。

俺と彼女の二年間は、恋するには長すぎて、愛に届くには遠すぎた。  
そしてあの日の決断の行方は、こんなにも遅れて今やって来る。

「愛してる？」  
彼女は聞く。

俺は答えず、目を閉じる。  
殺されるための決断をする。

鼻をすする、  
声が聞こえ、  
さよなら、と銃声が泣く。

## 05 静寂の中で

### 黒い外套の旅人

僕は旅を続けている。  
音を無くした、この世界で。

僕は音楽家だった。

愛用の弦楽器を背負って、歌いながら世界を旅していた。

僕には、歌が全てだった。それ以外、何も持たない。

ある朝、世界は音を無くした。

唐突に全ての音が、まるで初めからそんな物などなかったと言っ  
かのように、消えて無くなった。

世界は、静寂に包まれ、そして歌を失った。だから僕も、僕の全  
てを失った。

全ての音を無くした世界で、それでも僕は旅を続けている。

辿り着いたのは、小さな町。レンガ作りの建物に、石畳の大通り。喧噪も、踏み締める足裏の音も、吹き抜ける風音も、何一つ聞こえない。けれどもそこに、ちゃんと人は沢山いて、ちゃんと町は生きている。

辺りをきよろきよろと見回しながら、通りを歩いて、建物の玄関先に佇む老人を見つけ、肩をたたいた。老人は、ゆっくりと振り返った。

何か、御用ですか？

老人は、にこやかな笑みを浮かべて答えてくれた。

声は聞こえない。唇が、僕に読み取れるようにゆっくりと、そう動いた。

宿屋は、どちらでしょう？

僕は言った。声は出て来ない。身振りを交えながら、ゆっくりと唇をつごかす。老人は頷いて、右腕を通りの奥に向けて伸ばし、指さした。

そこの四つ角を右に折れなされ。すぐに看板が見えてくるよ。

僕は礼を述べて頭を下げると、教えられた通りに歩き始めた。

町は、静寂に包まれている。

子供たちが、通りを駆けて行く。片隅で若い恋人達が向かい合い、語り合っている。仲の良さそうな老夫婦が、手をつないで歩いている。

けれども町は、静寂に包まれている。

皆、誰かとぶつかったりしないように、辺りをきよろきよろと見渡しながら、通りに行く。

世界が音を無くした理由を、人は知らない。

世界が音を無くした意味を、人は知らない。

ある日突然訪れた静寂の中で、それでも人は、生きている。

通りを折れて、すぐに宿屋の看板が目飛び込んできた。

中に入ると、カウンターの奥で退屈そうに座っていた店の主人と、目が合った。

いらっしやい。

主人は破顔して、立ち上がった。

僕はカウンターに向かいながら、店の中を見渡した。縦長のカウンター、所狭しと並べられたテーブルに、丸椅子。二階へ続く階段。一階は食堂になっている。

カウンターに身を預け、身振りを交えて問いかける。

今夜一晩、泊めてもらいたいのですが。

ついでに夜、歌わせてもらえませんか。

つい、続けてそう言いそうになる。

主人は頷き、宿帳と、部屋の鍵を差し出した。僕はペンをとりあげて、宿帳に記入した。

音楽家かい？

僕の風体をみて、主人は聞いた。僕は頷いて、背中に担いだ荷物を降ろし、少し開いて中身を見せた。旅行用に小さくされた弦楽器が、顔を覗かせる。

主人は笑いながら頷いた。その目が、ちらりと店の奥へとむけられた。片隅に、ピアノが置かれてある。小さなステージも眺えられている。

主人の視線が、戻ってきた。主人は、何も言わなかった。僕も何も言わずに頭を下げ、部屋の鍵を受け取って、階段を上った。

宛てがわれたのは、二階の一番奥の角部屋。鍵を外し、扉を開けると、柔らかな香りが鼻孔をくすぐった。窓際に、綺麗な花が飾られている。清潔感のある、良い部屋だ。南向きの窓から、午後の日差しが差し込んで、部屋は明るかった。

ベッドの傍らに荷物を置き、中身を取り出す。もう随分と長いこと旅を共にしている、細身のギター。ネックの部分にかけたカバールを外し、ひとなでする。滑らかな木の感触が、手に心地よい。

本体を痛めないように緩めておいた弦を、張り直して弾き鳴らす。弦の振動が、楽器本体に伝わり、僕の体に届く。しかし音は聞こえない。

思いつくままにコードを押え、弾き鳴らす。やはり音は聞こえない。美しい音色で、音楽を奏で続けてきたギターは、しかしもう、歌う事を止めてしまっていた。

いや、違う。体に伝わる細かな振動を心地よく感じながら、思う。こいつは、一生懸命に歌ってくれているのだ。声を張り上げて歌っているのだ。僕と同じように。

けれど、世界は音を無くしてしまった。かつてあれほどまでに世界を包んでいた振動の分子は、空間を伝う方法を忘れてしまったかのように、歌を届ける事をしなくなってしまった。

どうして、世界は音を無くしてしまったのだろう。

手を止め、振動の余韻を残す細身の体を抱き締める。もう、君の歌を聴くことは出来ないのだろうか。二度と再び、共に歌う事は出来ないのだろうか。

静寂の中で、午後の暖かな日差しが、窓から差し込む。柔らかな香りが、鼻孔をくすぐる。

世界はもう、音を取り戻すことは、無いのだろうか。

弦を緩めてケースに仕舞うと、それを担いで部屋を出た。夕暮れに差しかかる大通りを、当ても無く歩きだす。

路地裏で遊ぶ子供たち。今日一日の仕事を終え、家路を急ぐ大人たち。細い煙が立ち昇る家々。明かりを灯し始めた窓。音を無くした世界で、それでも町は生きている。戸惑いながら、迷いながらも、それでも人は、前へと進む。

僕は、いつまで旅を続けるのだろう。

歌を失ったとき、同時に僕は、旅する意味も無くしてしまった。けれど、旅する事を止めてしまったら、何もかもをあきらめてしま

うかの様に思えて、嫌だった。だから立ち止まらなかった。

僕は、どこまで行くのだろう。何を目指すのだろう。

意味を失った旅路の果てに、何が待つのだろう。

空が真つ赤に染まり、やがて夜の帳が町を覆った。街灯の明かりが並んだ大通りを、僕は宿へと戻った。

店の中は、昼間とちがって、大勢の飲み客で溢れていた。静寂の世界で、それでも人は互いに語り合い、笑い合っていた。

店内を斜めに見渡した僕の視線は、その一角にとどまり、そこから動かなくなった。

片隅に詠えられた小さなステージと、ピアノ。その演奏席に、座っている人が居る。

長い黒髪を背中で束ねた、美しい女性だった。ピアノの前に、背筋を真つ直ぐに伸ばして座っていた。けれど鍵盤の蓋は閉まったまままだ。

僕はそこから目を離す事が出来ずに、その女性を見つめていた。

彼女は、両腕を膝の上に置いたまま、黒光りするピアノの表面を、じつと見据えている。固まってしまった様に、動かない。僕も、動けない。

小さく吐息を漏らす仕草をして、項垂れて、かぶりを振って、そして彼女は、僕の視線に気が付いた。目が合った。

少しの間だけ、そうして見つめ合った。言葉は要らなかった。

僕は人ごみの間を掻き分けるようにして、彼女の元へと向かった。彼女は優雅な動作で鍵盤の蓋を開け、クロスを剥いだ。白く輝く鍵

盤が、姿を現した。

僕は背中に担いだ荷物を降ろして、中身を取り出した。彼女の隣に腰掛けて、緩めておいた弦を張りなおす。一本一本爪弾きながら、それぞれの音を合わせる。勿論、何も聞こえない。けれども僕には、正しい音の位置が分かる。

彼女は、ゆっくりと鍵盤を弾いた。その瞬間、僕は、弾かれたように彼女を見た。

「フ」の音だった。

当然の様に、世界はすべからく無音に包まれていた。けれども、彼女の弾いた鍵盤の音は、確かに僕の心に届いた。

僕はAのコードを押えて、ひとつ弾き鳴らした。彼女が、驚いたように僕を見た。音なんて出なかった。けれども、彼女の心に何かが届いていた。

僕らは向かい合い、笑いあった。

何にする？

フリーリールなんて、どうかしら？

いいね。「この世の果ての物語」とか。

素敵ね。

彼女は鍵盤に向かった。僕は、姿勢を正した。

彼女の指が、まるで魔法の様に、鍵盤の上で踊り始める。僕の指

が、滑る様に動き出し、六本の弦を弾き始める。

音なんて、聞こえない。これっぽっちも、聞こえない。

けれども僕達の心は、一つの音楽を奏でている。卓越した奏者同士が通わせあう、心の音色で。

彼女が歌う。僕も合わせて歌いだす。二人の歌は、ぴつたりと重なり合い、美しいハーモニーを紡ぎだす。

聞こえやしない。ただ、感じるだけ。強く強くそう感じるだけ。

彼女の声が、僕の指が、彼女の指が、僕の声が、一つの音楽を紡ぎだす。そして曲のフィナーレを、二人同時に弾き出した。

六つの弦が、最後の振動の余韻を残し、やがて止まった。

僕は彼女と見つめ合い、それから微笑んで、笑って、大笑いした。

二人して、腹を抱えて笑った。こんなに楽しいのは、どれくらいぶりだろう！

気が付くと、店の中にいたみんなが、僕らに向けて拍手を送ってくれていた。音なんて全然出ていないのに、それでも皆、一生懸命に手を叩いてくれていた。

僕らは再び視線を合わせ、それから頷きあつて、再びそれぞれの楽器に向かった。

静寂の中で、僕らの指が、魔法の様に踊りだす。

翌朝、僕は荷物を纏めて部屋を出て、一階に下りてきた。

カウンターの奥に、主人が座っている。僕を見て、立ち上がった。

行くのかい？

主人の唇が動いた。僕は頷いた。主人は少し残念そうな顔をした。ピアノの前に、彼女が座っていた。僕が降りてくるのを待っていていた様だった。

彼女は、柔らかな笑みを、僕に投げかけてくれた。

また、ね。

彼女の唇が、そう言った。

僕はしっかりと頷いて、彼女に答える。

またね。

店を出て、町を出て、街道を歩きながら、一度だけ立ち止まって、振り返った。

その日辿り着いたのは、小さな町。レンガ造りの建物に、石畳の大通り。

いつか世界が音を取り戻したら、僕は再びここに戻るつ。

そして彼女と、本当の音楽を奏でよう。

僕は旅を続けていく。

音を無くした、この世界で。

## 06 奇人、変人、私のパパ

### ジョンレノ

聞こえる。風が木々を揺らす音が。以外は何もない静かだった夜に、騒音おばさん顔負けの大声がリビングに轟いた。

「今後、私のことはマスターと呼び！」

パパは両手で机を叩いて、深皿に入っていたスプーンが数滴跳ねた。いつもは落ち着いている表情が赤く染まって歪んでいるものだから、笑わずにはいられない。それも、むさい髭面で女王様言葉だなんて。

「笑うな、パパは真剣なんだから！」

口を噤んで真顔を演じてみたはものの無理があり、どうにも頬が痙攣してしまう。笑いを誘っておいて笑うなんて、そんなの狡い。

「ようやくな、読心術を身に付けたんだよ」

クラスの男子少数から、パパは変人とか奇人だとか呼ばれている。

私は無視を貫いてきたが、今度ばかりはそうもいかなそうだ。皆の言う通り、パパはおかしい。かく言う私も、無口な女の子として馬鹿にされるのもしばしば。

昔はこうじゃなかった。ママがいなくなつてから、私達は変人家族となつたんだ。不気味なくらい明るくなつたパパと、口数の少ない私とで、上手くバランスが取れているのだけれど。

それに、パパが明るくなつた理由も、何となく分かつていた。あからさまに元気の無くなつた私の為だ、きっと。どんなに笑わせたって、あどけない少女にはなれないし、男子達を蹴飛ばす男勝りにもなれないのに。

「よし、証明してみせようじゃないか！」

朝食をまだ食べ終わっていないというのに、パパは足元から一つの紙袋を取って、それを机上に置いた。見た覚えのあるロゴが描かれている。

中から出てきたのは、丁寧に包装されて、赤いリボンの付けられた箱。そこでようやく、今日が特別な日であることに気付く。

「開けてごらん」

期待に胸を膨らませているのは私よりもパパの方で、それは微笑みと、私に向けられる煌めく眼差しから容易に察しがついた。

何をそんなに期待してるのだろう、と思ってる内にも私の手は動いていて、少し荒々しく、包装用紙を破いていく。現れた木箱を開



けてみると、中には茶色の毛をフサフサとさせた、笑顔のクマさんがいた。

プレゼントを貰った嬉しさよりも驚きの方が大きく、クマさんとパパを交互に、素早く見比べてしまった。

「心を読んだから、欲しい物が分かったんだ」

誇らしげなパパを呆然と眺めるのもそこに、私はクマさんを箱から出して、思いつきり抱き締めた。どんなに両腕に力を込めたって、変わらぬ笑顔でいるクマさん。それが嬉しくて、より一層強く抱き締めた。頬が冷たい。

「で、何で持ってきたんだよ」

「学校には勉強道具以外は持ち込み禁止なんだぞ」

「ボツシューだ、ボツシュー」

私とクマさんを取り囲んでいる男子達の表情は、言葉とは裏腹に汚い笑顔を見せていた。気分は悪いが、怒るわけにはいかない。ママのように、私は大人らしくいなくてはならない。私は椅子に、クマさんは机に、おとなしく座っていた。

「誕生日おめでとー！ あ、それお父さんからのプレゼント？」

周囲の壁を押し退けてやってきた、私の数少ない友達である女の子は、クマさんを見るやいなや、はつきりとそう言った。彼女も読心術を持っているのかと思ったが、どうやら違うらしい。喋れない代わりに頭上にクエスチョンマークを表示した私へ、彼女は昨日のことを教えてくれた。

「娘の好きなものを教えてくれないかって、わざわざ私の家まで聞きに来たんだよ」

そこで、私が学校帰りに彼女と一緒に寄ったオモチャ屋で、このクマさんを三十分も眺めていたことを伝えたらしい。

何だ、読心術なんて極めてなかったんだ。そりゃそつか。

「でもいいなあ。そこまでしてくれるお父さんって」

私のお父さんは……、と愚痴を零している彼女を見て、私は胸を張った。パパは凄い人なんだ。

仕事に邁進していた頃とは別人のようだけれど、私は今の方がいい。生まれて初めて、パパから誕生日プレゼントを貰った日。遠くにいたパパを、初めて近くに感じた日。極めたのは読心術なんかじゃなかった。

「やつば変人だ。やることが変わってる」

「普通じゃそんなことまでしないもんな」



大人気ない男子達。何を思ったか、私は勢いよく立ち上がった。

「マスターを馬鹿にしないでよ！」

椅子が後ろへ倒れる音と、私の怒鳴り声。クラス中の生徒達は押し黙り、一斉に私へ視線を向ける。

周囲を気にすることもなく、私はすぐ隣にいた男子の股間を全力で蹴り上げていた。白目を向いて悶絶する男子より、やっぱり今朝のパパの方が面白い。パパは私を笑わせることに關して、誰にも引けをとらない。

長期出張からママが帰ってきてても、このまま変人家族でいたい。そう思いながら、また別の男子の股間を蹴り上げた。騒ぎの中央には、変わらぬ笑顔のクマさん。

一覽に戻る

## 07 僕は忘れない

白髪

撫で肩に掛かりの悪いランドセルを、軽くジャンプした勢いで元に戻す間も、「あきら」の視線は監視を怠る事が無かった。

への字に結んだ口元は固い意思を表し、その決意を込めた目の色は夕日を映して赤く燃えていた。

『今日こそ証拠を掴んでやるからな。』

そう一言呟くと、再び歩き始めた老人に気付かれぬ様、抜き足さし足で後を追った。

老人の名は「鶴田 亀吉」。

なんとも縁起の良さげな名前である。

名は体を表すとは良く言うが、その名の通り実に愛想の良い男だった。

顔には笑みを絶やさず、すれ違う人全てに挨拶をして行く。

『はいはいどうも。今日も良い天気ですね。』

まるで壊れたレコードの様にその言葉を繰り返すのだ。

実際晴れている時は問題無いのだが、雨が降ろうが、雪が降ろうがお構い無しである。

慣れている人ならば『ああそうだな。』と軽く受け流して終わりになるのだが、始めての人は決まって不信な眼差しを向けた。

そんな人物が、子供達の標的にならない筈もなく、毎日下校の時間になると、寄って集って囃し立てた。

『やい亀吉。何時もの言ってみろよ。』

『はいはいどうも。今日も良い天気ですね。』

『うわ。ばっかじゃねえの？今日は雨降ってるっつもの。』

そんなやり取りがこの町の日常になっていた。

もちろんご多分に洩れずあきらもその中の1人だったが、ちょうど1週間前に状況が変わったのだ。

1週間前の土曜日、あきらは醤油が切れたとの理由で母親に買い物を頼まれていた。

『ついでに卵と牛乳も買って来てちょうだい。』

既に薄暗くなった田んぼ道に母の言葉が蘇る。

『ちえっ。 ついでって何だよ。』

気味悪さを感じる心を誤魔化す様に、わざと声に出して言った。

蛙の合唱があきらの恐怖心を後押しする。

『ちえっ。 ついでって何だよ。』

今度はもっと大きな声で叫んだ。

あきらが怖がるのには実は理由があった。

今歩いているこの道は一本道で、あきらは何処に出掛けるにしても必ず通らなければ行けないのだが、問題は正に其処にあった。

ちようど家から300<sup>〓</sup>程行った所に小さな竹林があったのだから、昔聞いたその竹林に纏わる話しが頭から離れないのだ。

周りを田んぼに囲まれた<sup>〓</sup>四方の土地に、青竹がびっしりと空に伸びている。

『昔この地域を開拓する時に祟りがあってなあ。戦国時代の落武者の霊だと言っていたかのう？結局この竹林だけが手付かずで残されたのじゃ。』

誰に聞いたかも臆気な幼い頃の記憶の中で、その言葉だけは命を吹き込まれた様に、未だにあきらを縛り続けていた。

さわさわと笹の葉が風に鳴っている。  
( ついでって何だよ。 ついでって何だよ。 )

頭の中から竹林の存在を締め出す様に、呪文の様に繰り返した。  
次の瞬間！

眩い閃光と共に光の玉が、林の中から空に向かって真っ直ぐに昇って行った。

『な？何だ？』

余りの出来事に、あきらはその場にへたりこむと茫然自失で光の消えた方向を見つめ続けた。

ややあつて、若干の冷静さが戻って来ると、じわじわと恐怖心が心を領し始めた。

【あたり】の3文字が頭の中いっぱいに広がって行く。

あきらの過敏になった神経が、竹林の中に人の気配を捉えたのはその直後の事だった。

(ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。………)

訳も分からず心の中で謝り続ける。

ガサリ。と言って手前の竹がひと揺れすると、そこから人影を吐き出した。

『はいはいどうも。今日も良い天気ですね。』

薄れ行く意識の中で、あきらは確かに亀吉の声を聞いた。

その後、「亀吉宇宙人説」を唱えるも誰一人相手にはしてくれず、意を決して今日の追跡計画に踏み切ったのだ。

あきらにしてみれば、何としても決定的証拠と言っやつを手にしないう限り、帰る訳には行かなかった。

しかし亀吉は何処まで行く気だろうか？

気が付けば町からは離れ、暫くの間人の手による建造物を見ていない。

徐々にきつくなる登り勾配が山道に差し掛かった事を告げている。だいが日が傾いて来ていた。

心細さも手伝って、家の事が心配になって来た。

（学校終わってから直接此方に来ちゃったからな。お母さん心配してるだろうな。）

迷いが不安感を伴って心を揺らす。

背中で筆箱がカタリと鳴った。

『あれ？』

一瞬意識が離れた隙に亀吉を見失ってしまった。

あきらはこれ迄の数時間の労力を思っただきなくなった。

目頭が熱くなり、うつすらと溜まった涙がその張力に耐えきれず流れ落ちそうになる瞬間。

その顔にコツンと小石が当たった。

『え？』

異変に気付いた時には、もう既に手遅れだった。

見上げた視線の先に、絶望と言う名の落石が迫っていた。

其処からの数瞬間は、あきらにとつてとても長く感じる時間だった。

落石を視認すると同時に、視界の端に熱い躍動感を感じる。

人と言つよりは、獣に近い荒々しい生命力。

そう、まるで野生のゴリラを彷彿とさせる様なパワーがみなぎった。

（ウソ？亀吉？）

雰囲気はだいぶ違うが、紛れもなく亀吉その人だった。

亀吉はあきららの横に立つと、しっかりと足場を踏み固め、落ち来る岩を睨み据えた。

この間約〇.〇秒。

次いで空手の息吹にも似た呼吸法によって、体内の氣の流れをコントロールすると、細胞一つ一つ、いやミトコンドリアの一つ一つに蓄えられている電気を丹念に依り集めて行く。

爪先から踝へ。

踝から膝へ。

心の中で螺旋の動きをイメージしながらエネルギーを練り上げて、より大きな対流を生む。

行き場を無くした巨大なエネルギーの塊は、亀吉の意思によって作られた発露に向かって加速する。

胸の前で合わされた両掌の中心に、爆発的な流れが集中していった。そして具現化。

一気に圧縮された電気はプラズマ球となり、あきららの目の前ではつきりと発光して見せた。

『ハーーーーッ！！！！』

掛け声と共にプラズマは岩石を貫き、焦点温度1万度をゆうに超える超々高熱により、一瞬でこれを蒸発させた。

あきらは全てを、その目蓋に焼き付けた。

もちろん小学生のあきらには、その殆んどが理解の範疇を超えていたが。

少なくとも肌で感じた達人の技は、一生忘れる事がないだろう。

あきらは頭の中で繰り返していた。

『亀吉がハーハーッ。』

『亀がハーハーッ。』

『カメガハーハーッ。』

『カメハメハーハーッ。』

後年、鳥〇明自らが描いたマンガの中で、達人の素晴らしさを説いたのは至極当然の事だったと言えよう。

了

## 08 御覚えこれあるべく候

庚申吉日

火事と喧嘩は江戸の華と申しますが、人の多いこの町では小さな揉め事など日常茶飯事でございます。今もほら、財布を掏ったの掏らないのと道の真ん中で揉め事が。何処にでも居そうな町人騒の男に向かつて、若い娘がつつかかっております。

「だから、俺は掏ってなんてねえ」

「へえ。それじゃあ、その手に持つてる財布はあなたのなの？」

「いや、これは……。違うんだ、知らねえ男にいきなり渡されたんだって」

何やらおかしい言い訳をしている男は置いといて、問い詰めている娘の方は歴としたお旗本の末娘でございます。名を紫乃。歳は二十を一つ二つ越えて居るはずですから、まあ少々……いやさ、かなり嫁き遅れですなあ。

えっ、何でそんな事を知っているかですって。

失礼致しました。やつがれは、夢吉と申しまして紫乃の飼猫にございます。

「……まあいいわ。とにかく、財布を返して」

ため息を吐いて男から財布を取り返すと、紫乃はさっさと歩き出しました。

「ちえっ、なんでい。気の強い女」

後ろで男が吐き捨てるのを耳にした紫乃の肩がピクリと震えました。

そう、この気の強さが紫乃の嫁き遅れの原因でございます。これはやつがれの先輩猫に聞いたことでございますが、子供の頃からお転婆だったそうで、木に登ったり、兄君達とやっとうの稽古に励んだりとおよそ娘らしい育ち方をしております。しかしながら決して容姿が醜いわけではなく、むしろ美人といっても差支えないほどですし、面倒見が良く、働き者でもございます。やつがれがもし人であつたなら、是が非でも嫁にするのですが。

さて、紫乃ですが、八丁堀へ行く途中でございました。やつがれは紫乃の足元を人に踏まれぬようにして行きます。八丁堀には紫乃の従妹、由宇の嫁入り先、立川家がございますのでおそらくそち

らに行くのでしょうか。

立川家は代々同心のお家で由宇の夫、立川慶太郎も定廻り同心でございます。

立川家の家人に來訪の意を告げて、紫乃は屋敷に入っていきます。やつがれも一緒に行きたいのですが、他所様のお屋敷に勝手に上がることはできません。仕方なく庭伝いに紫乃の向う部屋に先回りします。

縫物をしていたらしい由宇は紫乃を笑顔で迎えました。

「紫乃さま、お呼び立てして申し訳ありません」

「いいのよ。どうせ暇なもの、気にしないで」

由宇の向いに座り、紫乃は笑いました。

「それより体の調子はどう？」

紫乃の問いに、由宇は大きく張った腹を撫でて、

「大丈夫です。お医者さまの太鼓判つきですもの」

「そう……」

昔から実の妹のように可愛がってきた由宇の幸せそうな様子にほっとして紫乃は頷きます。

「ところで文には何か話があるようだったけれど」

途端に由宇の表情が曇りました。

「はい。あの、紫乃さまは、村上新之助というお方をご存じですか？」

「村上？」

聞いたことのない名前のように、紫乃は首を傾げます。すると由宇は本所に住む御家人だと言いました。

「その、村上新之助のがどうかしたの？」

「村上さまの離縁された奥様が騒動打ちをなさるらしくて……」

「騒動打ちですって！」

「それで、できれば紫乃さまにお手伝いしていただきたいと頼まりましたの」

ほう、騒動打ちとはまた、なんとも物騒な……。あつ、いえ、やつがれの感想などいらぬものでございました。

紫乃はきりりと眉尻を上げて、由宇の肩をつかみました。

驚いた由宇は目を真ん丸に開きましたが、紫乃はそんなことお構いなしに、

「手伝うわ！ それで、その離縁された奥様っていうのはどんな方なの？」

「お晴さまとおっしゃって、八丁堀の私の実家の近くの山中様のお嬢様です。紫乃さまもご存じですわ」

紫乃はすぐに思い出せない様子でございましたが、しばらく考えた後、ああ、と得心の行つたようです。

「山中……ああ、思い出したわ。明日にでも伺つて良いか使いを出してみしよう」

それを聞いて、由宇はどこかほっとした様子で愁眉を開きました。

「ありがとうございます」

「お晴さまのことは私に任せて、あなたは元気な御子を産むことだけを考えて体を大事にしないさいね」

「紫乃さま、まるで母上みたい……」

くすりと笑つて由宇は大きく頷きました。

騒動打ちは、まあ、なんと申しませうか。先妻側が徒党を組んで、後妻側に押し掛け家中を暴れ回り、家財道具を壊して行くとい



うものでございます。後妻打ちとも申しますが、簡単に言えば夫に浮気された腹いせでございますな。

紫乃は先に申しました通り、ずいぶんと乱暴者……いやさ、お転婆でございますから、騒動打ちと聞けばすぐさま駆けつけ助太刀をするといったあんばいで、近頃はこのような入づてに助太刀の依頼が来るほどに有名になってしまいました。そして、騒動打ちに助太刀するたびに縁談が一つ二つと減ってゆき、今では全く来なくなりました。まあ、男の側からすれば、年中竹刀を振り回すような女を妻にするほどの度胸は無いのかもしれませんが。

中二日ほど経って、紫乃の姿は八丁堀の山中家にございました。

山中家には、紫乃だけではありません。白鉢巻きにたすきを掛け、竹刀や、ある者は木刀を携えた女衆が十人ほど集っております。男たちは障子の向こうでしきりに女衆の様子を気にしているようですが、中に入るような真似は致しません。

やつがれは雄でございますが、まあ猫ということで部屋の隅に丸くなって成り行きを見守っております。

「皆々様にわざわざお集りいただきまして、まことにありがたく存じます。本日はどうぞ、よろしゅうお願いいたします」

木刀を手にそう言った女性が例の『お晴さま』でしょうか。紫乃よりも二つ三つ年かさに見えますが、なかなかの器量良しです。いえ、もちろんやつがれには紫乃が一番でございますが。

お晴は紫乃の顔を見て、

「本日はお旗本、生田様のお紫乃様にまでご助力いただき、鬼に金棒でございます。いざ、参りましょう！」

勇ましく、また恐ろしい宴の始まりです。

本所の村上家でも、女衆がたすきを掛け、臨戦態勢が取られておりました。

やつがれは、庭の木の上から見物することにいたしました。

お晴達は、紫乃を先頭に台所から雪崩れ込み、思い思いに竹刀を振り回します。村上家の女衆も負けじとお晴達を迎撃し、乱闘騒ぎです。「やあ！」と振り下ろした竹刀を村上家の女が受け、払い除けようとしますと、その横から別の竹刀が茶碗や鍋をたたき壊します。別の女は奥で障子や襖を滅茶苦茶にたたき、そうかと思えば、仏壇をひっくり返す者、箆笥の中身を引っ張りだす者など、屋敷中大変なことになっています。

その中で紫乃はというと、なにやらいかつい女中と竹刀を交わしておりました。なんともはや、幼い頃からやつとうの稽古をしていた紫乃と互角に対峙するとはかなりの手練れと見受けられます。紫乃が突くと女中は横に避け、掬いあげるように竹刀を振り上げると返す手で紫乃に向かって振り下ろします。紫乃はそれを竹刀で受け止め、押し返し、相手が均衡を崩した隙を見て強かに打ちすえたかに見えました。が、女中は転がるように竹刀を避け、逆に紫乃が均衡を崩しよけたところに下から突きを繰り出すと、危ういところでお晴が加勢にきました。

騒ぎが起こつて半刻も経ったでしょうか。

おもむろに、紫乃がとん、と竹刀の先で床を叩きました。

「まだ、懲りませんか？」

紫乃を始めとして全ての者が息を切らしておりました。

村上方の女衆の一人が、よろよろと進み出て、お晴の足元に座り

込むと、

「どうかこれで、ご勘弁願いたく……」

家財道具をほとんど叩き壊されて、くやしそうに決まり口上を口にしました。

ああ、これで騒ぎは収まりました。お晴はまだ口惜しそうにしていきましたが、どこか晴れやかな表情を浮かべると、女衆を引き連れて無言で帰っていきます。

「ちよつと、あんた」

しんがりを務める紫乃に向かって、あのいかつい女中が声をかけました。

「ずいぶんと慣れているようじゃないか。名前を聞いてもいいかい」  
武家の女中とは思えない言葉遣いではありますが、まあ気にするほどのことではありません。

紫乃は女中を見上げると、

「先に名乗るのが礼儀ではございませんか」

「あたしは、きん。ここに出入りさせてもらってる大工の女房さ」

「……紫乃と申します」

それだけ言うと、紫乃は村上家を後にしました。

八丁堀を抜けたあたりでやつがれが姿を現すと、紫乃はちょっと笑ってやつがれのそばにしゃがみこみました。

「またこんなところまで来たのね。困った子」

やつがれの頭を撫でてくれながら、紫乃は困ったように溜息をつき、

「ああ、また父上に叱られるわね……」

ぼつりとつぶやいて、気の乗らぬ様子で家路を進んでゆきます。

やつがれも、紫乃の足元について帰ることにいたしました。

## 09 傘貼りと兵衛

### Bloody Benten

濡れ縁に雀。障子の穴から乾いた風。骨組みとなった古傘に糊を塗り、柿渋を塗りとくった朱染めの和紙をビシヤリ、と貼り付ける。長屋の手狭な三坪六畳間は、足の踏み場もないほどまでに傘で埋め尽くされていた。その中で大喜多与兵衛は黙々と傘貼りに没頭している。

男が一人、断りも無く木戸から入って来た。与兵衛は意にも介さず。

「相変わらず精が出るのお」

男は土間で埃を払い、かまちに腰を降ろす。

「お前も暇な男だな。いいのか？ こんな所ほつつき歩いてて」

「いいのさ。廻り方同心なんざ暇な役目よ」

男の名は久間紀之介。与兵衛とは旧知の仲である。雀が何かに驚き音も発せず飛び立つ。柔らかな日射しだけが濡れ縁に残る。

「それより聞いたかい？」

「何をだ」

「辻斬りだよ。今朝、美濃屋んとこの角に仏さんが転がってなあ。



巷じゃこの話でもちきりだぜ？」

近ごろ浪人風情が他国から多く流れ込んで来た。そのせいもあってか治安は乱れ、町人たちも枕を高くしては寝られない毎日。

「俺は昼まで寝てたから知らん」

「呑気なもんだな。もうお天道様も傾いちゃったぜ」

「だいたい辻斬りなんざ夜出歩かなければいいんだ。俺のような貧乏侍には色町で遊ぶ金子も無いしな」

与兵衛は手を休め、久間のほうを向く。

「何が色町か。夜ごと夜鷹を連れ込んでるって聞き及んでいるぜ？」

「人聞きの悪い。あれは雨宿りさせたり夜露を凌がせてやってるだけだぞ」

「どつちにしろ、いい噂は立ちやしないよ。卑賤の輩と武士であるお前様が、ひとつ屋根の下で暮らしてんだ。ましてや若い男女と来らあ、噂も立つってもんよ」

「噂など知った事か」

「とにかくだ。あんなもん連れ込んでないで、いい加減嫁でも貰ったらどうだい？」

「なぜ所帯の話になる。だいたい十石二人扶持でどうやって嫁を食わす」

「だからよ、お前様もいつまでも傘なんざ貼ってねえで、奉行所に仕官しろい。俺が口利きしてやんから」

「俺は此れが好きなんだ」

ピシヤリ。

与兵衛は再び手を動かし始めた。口の減らない久間は、放っておけばいつまでも喋り続ける。

「ま、茶も出ねえ事だし、俺はこの辺で……」

「お前、何しに来たんだよ」

「お？」

久間がダルそうに腰をあげ長屋を出ると、晴れていたのが嘘のようなどんよりとした空模様。

「こりゃ、ひと雨来そうだな」

「その傘持つてきな」

「おう、そいつぁ有難てえや。お前様の傘は滅多に破れねえって巷でも評判だからな」

先ほどまでとはうって変わって湿った風が、蛙の声を運んで来る。与兵衛も思わず障子を開け、身を乗り出し天を仰ぎ見た。

ポツリ。

と、鼻先を濡らす一滴の雨粒。しかしながら一向に降るのか降らないのか、はつきりしない曇り空。

暫くして、猫の額ほどの庭に植えられた紫陽花の葉を、雨が叩く音。蛙の声が呼び寄せたか、夕暮れ近くになるにつれ強くなる雨脚。

「ひゃあ、すっかり降られちゃったよお」

木戸からいきなり入って来た女は濡れ鼠。抱えていた蓆を土間に放り投げる。

「お理津か。そろそろ来るんじゃないかと思ってたよ」

「アタイを待ちわびてたんかい？」

「馬鹿言え。ほら、そつちの傘はもう乾いているから畳んでいいぞ」  
女はその辺の傘を畳み、自分の座る場所を作った。

「手拭い借りるよ。まったくさ、河原でお侍の相手してたら、いき

なりこの大雨さ。金子も取らずに逃げて来ちまったよ」

「夜鷹が昼間っから商いかよ」

「しょうがないだろ？ 今どきたったの二十四文なんだ。明るかうが暗かるうが、やれる時にやんないと飢え死にしちまうよお。それともアンタが食わしてくれるってのかい？」

「俺の稼ぎもお前とたいして変わらん」

忙しなく髪の毛を拭うお理津は、久間に負けないくらい減らず口を叩く。

「嫌だねえ貧乏話は。アタイだって芸事のひとつでも覚えてりゃ、遊廓でもっと稼いでやるんだからねえ」

「お前の不器用は生まれつきだからな」

与兵衛を睨み付けるも一瞬。すぐさま甘い声で囁く。

「でもね、男をよろこばせる事にかけてや、誰にも負けやしないよ」

「こら！ その傘はまだ乾いておらん！」

「んっもおおお、狭い狭い狭いつ！ こんな傘だらけの部屋だから……」

朱色の花が咲き乱れる六畳間、小さな拳で膝をだむだむと叩く。

そんな姿を見て、与兵衛は微笑むのである。

薄暗い中で糊を仕舞い、乾いている傘を畳んでまとめあげる。お理津は雑穀を炊き、梅干しと漬物で質素な食卓を作る。そして、い

よいよ何も見えなくなつてから火は灯された。菜種油も安くはない。

「聞いたか？ お理津。昨晚辻斬りが出たそつだ」

「物騒だねえ」

「他人事のように言うでない」

二人はメシを平らげると、酒を酌み交わす。

「アタイの事、心配かい？」

「……」

答えず、黙つて杯を突き出す。

「刀で斬られるか飢え死にするかの違いじゃないか」

「酔つてるのか？」

「このくらいじゃ酔いやしないよ。さて、と、雨も止んだみたいだ。

アタシやそろそろ行くよ」

「俺も出来上がった傘を納めに行かねばならん。そこまで送る」

雲の切れ間から少し欠けた月が顔を覗かせている。湿った風に柳が揺れれば、緑の匂いが鼻孔をくすぐる。通りはぬかるみ。

「その辺の道ばたまでだつてのに送られるなんて、変な話だよ」

「ついでだ。夜が更けたら夜露を凌ぎにまた来るといい」

蛙の代わりに虫の声。二人は水溜まりを避けながら歩く。

「こんな日は八幡さまの軒の下ぐらいでしか出来ないねえ」

「罰当たりめが」

「このあたりでいいよ」

八幡社の手前。橋を渡れば武家屋敷が建ち並ぶ。荏を抱えたお理津は物陰の闇溜まりへと姿を消した。

やや歩くと、町屋の先に提灯が揺れている。闇を透かして見れば、それは久間だった。

「夜の見廻りかい？」

「おお、与兵衛か。まあ、これもお役目さ。お前様は？」

「仕上がった傘を納めに行くところさ。雨が止んで良かった」

「良かないさ。屋敷でゆつくり杯でも傾けてるつもりだったのによ」  
その時である。今、与兵衛が歩いて来た方角から叫び声のような物が上がった。

「なんだ？」

久間が呟いた時、与兵衛は既に走り出していた。橋を渡り八幡社の手前。月明かりの下、泥まみれのお理津と、刀を振りかざす一人の浪人。

「待てい！」

その時を与兵衛の一喝が止めた。

「貴様はあれか、世を騒がせている辻斬りと言う奴か」

「は」

「お理津、大丈夫か？」

通りの真ん中に倒れるお理津に声を掛ける。幸いにも斬られてはいない。

「い、いきなりコイツが斬りかかってきたんだよ！」

「俺の家に逃げている」

「ア、アンタこそ逃げなよ！ アンタ、人斬った事なんて無いんだろ」

鳥居の下で刀を構えていた影が、にわかに与兵衛のほうを向いた。

「……どこの誰ぞ知らんが、邪魔立てするなや。たかが夜鷹の一匹ぐれえで」

流れ者だろうか、深編笠の下から聞こえる声には多少の訛りが含まれている。

「そうはいかぬ」

言いながら与兵衛は、束ねてあった傘からその一本を抜き取り、そして残りの束を投げ捨てた。

「与兵衛！」

後を追って駆け付けた久間が叫ぶ。しかし、その時彼は既に動いていた。

泥を跳ね上げながら一直線に浪人へと向かってゆく。左手には朱色の傘。

ぴしゃ

浪人は左足を半歩前へと摺り足。雨よりも冷たい笑みを口元に浮かべながらの右、上段の構え。その動きには無駄が無く、かなりの手練れであることが窺える。虫たちも沈黙する朱塗りの鳥居の下。

ばばっ！

大輪の花が咲き、浪人の視界が朱に塗り潰された。が、うろたえも一瞬、構わず振り下ろされる一閃。だがしかし、手応えもなく傘を両断。

「ぐはっ」

刃を上に向けた刀が背に、貫かれぬまま突き立てられていた。その柄には腰を落とし、前のめりの与兵衛。浪人の頭から深編笠が音も無く落ちる。

「なまくらも、役には立ったか」

抜けない刀を手放し立ち尽くす和兵衛と、背にその錆の浮いた刀

が刺さったまま、俯せに倒れる浪人。

そして、張り詰めた時が再び動き出したかのように、いきなりの豪雨。それは噴き出した血を洗い浄めるかのよう。

「与兵衛！」

駆け付ける久間に与兵衛は顔を上げた。

「たまには刀の手入れもせんと、いかな」

「ふっ、ははははっ！　そうよ、お前様は傘ばかりだからいけねえ」

「まあいいさ、俺は傘貼りが好きなんだからな」

橋の袂に転がる傘の束を拾い、抱えた束からまた一本抜き取りお理津のもとへ。

「帰ろう」

言いながら傘を開く。お理津は黙って頷き、その下に入り寄り添う。久間の見送る中、朱色の傘が雨に煙ってゆくのであった。

〔完〕

## 10 命の篇

乳酸菌をとっている

△コラーゲン△

雪の吹きすさぶ雪原の中、可憐な白に真つ赤な花を咲かせていた。

距離は三百

銃を向けて

撃つ

雪原といえどもスコープの反射によって発見される恐れがあるので、睨んでいるのはモシンナガンの照星だ。

考えている間に一人

装填ととも瞬きをして

次の瞬間にはまた一人

敵はこちらを探し出そうとしているので、装填の時間を惜しんで速射する。

頭を撃つ

倒れる

足を撃つ

倒れる

腹を撃つ

倒れる

頭を撃つ

倒れる

腹を撃つ

倒れる

小銃の速射速度には限界があるので、生き残った一団が自分のいる建物に足を踏み入れた。

大人数を相手するために狙撃を繰り返しているが、サブマシンガンも装備しているため、数十人程度なら簡単に反撃できる。

聞こえるのは

自らの呼吸

静かな足音

角の向こうで砂利を踏む音

建物の角から出てきた兵士を手始めに、目に入った敵に弾を撃ち込んでゆく。

それは何度も見たことのあるありきたりな光景で、ただ仲間と共に動くだけ。

腕が千切れる

頭がはぜる

足が舞う

背を見せて逃げようとしている最後の敵の背に数発の弾を打ちこんだところで、残り二発になった弾倉を交換する。

数えていた通りに弾の二発だけ残っていることを確認した後、空の弾倉を鞆に入れて次の敵を探す。

真つ白な息

赤く染まる雪

ときおり敵の兵士が自分のことを『白い死に神』と呼ぶのを聞いたことがある。

なんのことはない

自分は狙撃の達人でも殺しの達人でもない、ただ単にやれと言われたことを練習通りに行っているだけのことだ。

^飽食の僕^

さあ晚餐だ、命を食もう。

肉を

草木を

両脚羊を

言われたものは何であれ調理する。

肉でも

草木でも

両脚羊でも

客の持ち込んだ材料で作ることもあるし、客の無謀な注文にも全力で答える。

あるときは土や岩を食べたいと言った客に、注文通りの土や岩の料理を出した。

またあるときは、見たことの無いものを調理してくれといった客には、最高に美味しい料理をだしてやった。

客が喜んで料理に手を出そうとしたところでそれを引っ込めて、客に言った。

お客様のために空気を料理してみましたので、存分にお召し上がりください、と。

菜食主義者の客が来て、肉の味がどうしても忘れられないので、命を奪わずに食べられる肉料理を食べたいと言われたので、その客には彼の片腕を調理して出した。

そう：私はそういう料理人だ。

そして人は私のことを『料理の達人』と呼ぶようになった。

だが私は自分が何かに精通しているなどと思ったことはない。なぜなら私はしたいことをしたいように行っているだけなのだから。